

Ochiai K, Yasuda M, Tanaka T, Kanehira C. Palliative and survival benefit of radiation in the recurrence of epithelial ofepithelial ovarian carcinoma. 11th Biennial Meeting of the International Gynecologic Cancer Society. Santa Monica, Oct.

- 19) 磯西成治. (招請講演) Intraperitoneal Chemotherapy in optimal Ovarian Cancer. 2nd Taxol Forum. Dengeu-Seoul, Sept.
- 20) Yanaihara N, Caplen N, Bowman E, Seike M, Kumamoto K, Yi M, Stephens RM, Okamoto A, Yokota J, Tanaka T, Calin GA, Liu CG, Croce CM, Harris CC. Unique microRNA molecular profiles in lung cancer diagnosis and prognosis. 97th Annual Meeting of the American Association for Cancer Research. Washington DC, Apr.

IV. 著 書

- 1) 橋本朋子, 矢内原臨, 岡本愛光. 卵巣癌の発生, 進展に関与する遺伝子. 落合和徳編. 卵巣腫瘍のすべて. 東京: メジカルビュー社, 2006. p. 64-73.
- 2) 岡本愛光, 矢内原臨. 遺伝子治療. 落合和徳編. 卵巣腫瘍のすべて. 東京: メジカルビュー社, 2006. p. 76-85.
- 3) 岡本愛光, 日本婦人科腫瘍学会編. 子宮体癌治療ガイドライン. 東京: 金原出版, 2006.
- 4) 高野浩邦, 山田恭輔, 岡本愛光, 坂本 優. 細胞遺伝学 (卵巣癌における DNA アレイ解析と遺伝子診断への応用). 安田 允編. よくわかる卵巣癌のすべて. 大阪: 永井書店, 2007. p. 160-7.
- 5) 落合和彦, 小林重光. 細胞診. 安田 允編. よくわかる卵巣癌のすべて. 大阪: 永井書店, 2007. p. 67-71.

泌 尿 器 科 学 講 座

教 授: 颯川 晋	前立腺癌, 泌尿器悪性腫瘍, 腹腔鏡手術
教 授: 小野寺昭一	尿路性器感染症
准教授: 池本 庸	男性科学, 前立腺癌
准教授: 山崎 春城	前立腺癌, 腫瘍生化学
准教授: 岸本 幸一	尿路感染, 老人泌尿器科学
准教授: 和田 鉄郎	尿路性器腫瘍, 癌化学療法
准教授: 清田 浩	尿路感染症, 前立腺肥大症, エンドウロロジー
講 師: 古田 希	副腎腫瘍, 尿路結石
講 師: 鈴木 康之	排尿障害, 女性泌尿器科
講 師: 浅野 晃司	尿路上皮腫瘍, 分子腫瘍学
講 師: 波多野孝史	腎細胞癌
講 師: 三木 健太	前立腺癌

研 究 概 要

I. 泌尿器悪性腫瘍に関する研究

1. 基礎的研究

- 1) プロテオーム解析による前立腺癌および尿路上皮癌特異新規腫瘍マーカーの探索

プロテオーム解析法による新しい前立腺癌および尿路上皮癌バイオマーカーを探索している。本研究から前立腺癌新規バイオマーカーTT902を発見した。前立腺摘出検体を用いた検討ではTT902の発現と前立腺癌の悪性度, 進展度に関連がかった。これらの結果は第95回日本泌尿器科学会で発表された。

2) 泌尿器癌に対する遺伝子治療の基礎的検討

前立腺癌, 膀胱癌に対する新しい遺伝子治療の基礎的研究を行っている。前立腺癌に対しては, 自己増殖型レトロウイルス (replication competent retrovirus: RCR virus) やレンチウイルスに前立腺特異的プロモーターを使用することで, 前立腺特異的ウイルスベクターを開発し, 導入効率, 治療効果, 安全性について検討している。この結果は第95回日本泌尿器科学会で発表し, Molecular Therapy 誌に報告した。

3) 前立腺癌幹細胞についての検討

現在その存在が示唆されている前立腺癌幹細胞の分離とその性質の同定, さらに癌幹細胞に対する治療を目標に研究している。これまでにヒト前立腺癌細胞株のなかでCD133陽性の分画には幹細胞様の性質を有する細胞が存在することを発見し, Cancer Research 誌に発表した。

2. 臨床的研究

1) Intermediate risk 前立腺癌に対する小線源永久挿入療法における補助内分泌療法効果の検討

早期前立腺癌に対する放射線治療として I¹²⁵ 密封小線源を前立腺に挿入する小線源永久挿入療法を 2003 年 10 月より行っている。当院は国内 2 番目に同治療を開始しており、現在治療計画法による線量計算の違いや、副作用の発生頻度につき研究中である。Intermediate risk 群に対して補助内分泌療法効果を検討している。

2) High risk 前立腺癌に対する、外照射併用高線量率組織内照射療法の検討

High risk グループの前立腺癌の治療の際に外照射併用高線量率組織内照射療法 (HDR brachytherapy) とホルモン治療の種類と投与期間の違いにより治療効果と副作用にどのように影響するかを検討している。

II. 感染症・STD に関する研究

1. 基礎的検討

近年蔓延しつつあるキノロン・セジキシム耐性淋菌に対する各種薬剤併用効果を *in vitro* で検討した、その結果、マクロライド系抗菌薬 (クラリスロマイシンあるいはアジスロマイシン) と β -ラクタム系抗菌薬 (セフテラムあるいはオグメンチン) との間に抗菌力の増強効果を認め、これを J Inf Immun に掲載した。

2. 臨床的検討

「東京泌尿器科 STD 研究会」を組織して、首都圏における淋菌性尿道炎の動向について調査を継続している。各種抗菌薬の淋菌に対する感受性の検討でニューキノロン薬に対する耐性化がさらに強まり、またセフィキシム耐性株も出現してきた。1 で述べたような基礎的検討から淋菌性尿道炎に対するクラリスロマイシンとセフテラムの併用療法について臨床研究を行っている。現在のところこの併用療法では下痢などの重篤な副作用もみられず 90% 以上の臨床効果を得ており、この結果を日本性感染症学会第 20 回学術集会で発表する予定である。

III. 排尿障害に関する研究

1. PDE5 阻害剤の排尿障害治療効果の検討

PDE5 は尿路にも存在することが多くの基礎実験で確認されており、その阻害剤を使用することにより排尿障害が治療できる可能性が示唆されている。そこで臨床的に PDE5 阻害剤が実際に前立腺肥大

症の排尿障害を改善するかを検討し、第 94 回日本泌尿器科学会総会 (福岡)、ならびに第 18 回排尿管理研究会 (京都) で発表を行った。

2. 過活動膀胱の尿意切迫の指標の有用性の検討

本邦発の過活動膀胱症状質問表 (OABSS) を用いた塩酸プロピペリンの臨床効果の検討について第 13 回日本排尿機能学会にて発表を行った。

3. 夜間頻尿の病態解明

夜間頻尿の病態解明に取り組むため、夜間尿量比と心不全の関連について排尿状態評価法の Frequency-Volume (FV) chart. と心不全の臨床的指標である BNP (脳性ナトリウム利尿ペプチド) を使用して検討し第 95 回日本泌尿器科学会総会にて発表予定である。

IV. 腎・内分泌・副腎腫瘍に関する研究

1. 腎温存手術後の患側残存腎機能評価における術前 99mTc-MAG3 腎動態シンチグラフィの有用性の検討

本研究は 99mTc-mercapto-asetyl-triglycine (以下 MAG3) を用いた腎動態シンチグラフィによる患側残存腎機能の評価・術前予測を試み、術後の患側残存腎機能の術前予測が可能であるか否かを検討した。腎温存手術前後に 99mTc-MAG3 を用いた腎動態シンチグラフィを施行した 11 例について、有効腎血漿流量 (ERPF) の術前予測値と術後残腎での実測値について比較した。術前 ERPF 予測値と実測値の間には強い相関が認められ、術後残存腎機能の術前予測のために 99mTc-MAG3 を用いた腎動態シンチグラフィは、有用な検査の一つであると考えられた。

2. 副腎腫瘍における腹腔鏡手術の有用性に関する検討

副腎腫瘍の標準術式である腹腔鏡下副腎摘除術の有用性を検討するため、開放性手術との retrospective な比較検討を行った。対象は過去 10 年間に手術を施行した片側副腎腫瘍 138 例で、内訳は腹腔鏡下手術が 90 例、開放性手術が 48 例 (うち 6 例が腹腔鏡下手術からの conversion) であった。疾患の内訳では、APA, CS, PCS の皮質腺腫が約 60% を占め、PCT は約 20% であった。両術式の周術期データの比較では、腫瘍径に差があるものの、手術時間は同等。出血量は、腹腔鏡下手術が有意に少なく、輸血例数も腹腔鏡手術が少なかった。腹腔鏡下手術における拡大視野、気腹圧による出血リスクの軽減が理由と考えられた。また、腹腔鏡下手術は、術後の歩行、食事の開始、および退院までの期間が有意に短

く、術後の QOL が良好な術式であることが示唆された。

V. Endourology & ESWL に関する研究

1. 前立腺肥大症に対する経尿道的前立腺焼灼術 (HoLAP) の臨床的検討

HoLAP は出血が少なく生理食塩水を還流液として用いるため TUR 反応がないため TUR に替わる治療法として期待されている。平成 17 年から現在までに 45 例にこれを施行し、良好な治療成績を得ており、この結果を第 21 回日本 Endourology・ESWL 学会で報告する予定である。

2. 上部尿路結石に対する体外衝撃波結石破碎術
平成 14 年 7 月に体外衝撃波結石破碎装置ドルニエ D を導入し、平成 19 年 3 月までに 776 例、808 結石を対象に ESWL を施行した。結石の部位別内訳は腎結石 340 結石、尿管結石 468 結石であり、部位別の有効率は各々、腎杯結石では 78.5%、腎盂結石では 76.7%、上部尿管結石では 84.8%、中部尿管結石では 88.8%、そして下部尿管結石では 87.3% であった。これらは外来日帰り治療を原則としており、良好な治療成績を得ることができた。

3. パイロニー病に対する体外衝撃波治療 (ESWT)

平成 15 年 8 月に高度先進医療として認可されたが、平成 17 年 7 月に高度先進医療を取り消されたため自費診療で行うこととなった。現在までに 12 例に本治療を行った。11 症例では陰茎海綿体の硬結は縮小あるいは軟化し勃起時の陰茎痛は消失したため性交は可能となり良好な成績を得ることができた。今後さらに症例を積み重ねてその有効性について検討していく予定である。

「点検・評価」

2006 年は論文投稿や日本泌尿器科学会をはじめ多くの分科会での研究発表など比較的多くの研究業績を残すことができた。腫瘍研究ではプロテオミクス、遺伝子を中心とした基礎研究や他施設共同での臨床研究で多くのプロジェクトが進行している。感染症・STD に関する研究は、近年注目されている薬剤耐性淋菌を基礎と臨床の両面から検討中である。排尿障害・ED に関する研究は排尿症状の客観的評価法を確立し、臨床研究を中心に加齢や睡眠障害と排尿状態との関係を比較検討した。腎・内分泌・副腎腫瘍に関する研究においては、近年の画像診断装置の進歩・発展に伴う最新の知見を、形態と機能の面から報告をすることができた。現在、放射線科と

共同での多くの臨床研究も進行している。また、Endourology の領域と重複するが、副腎腫瘍に対する腹腔鏡下手術がすでに標準術式であることを報告し、腎臓における部分切除、ablation therapy などの新しい分野への臨床研究も進行している Endourology & ESWL 研究班は、従来より行われている尿路結石、パイロニー病に対する研究に加え、前立腺肥大症に対するレーザー治療 (HoLAP) を導入し、積極的に臨床研究を行っている。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Egawa S, Kuruma H. Search for biomarkers of aggressiveness in bladder cancer. *Eur Urol* 2006; 50: 20-2.
- 2) Namiki S, Egawa S, Terachi T, Matsubara A, Igawa M, Terai A, Tochigi T, Ioritani N, Saito S, Arai Y. Changes in quality of life in first year after radical prostatectomy by retropubic, laparoscopic, and perineal approach: Multi-institutional longitudinal study in Japan. *Urol* 2006; 67(2): 321-7.
- 3) Matsumoto K¹⁾, Egawa S, Satoh S¹⁾, Kuruma H, Yanagisawa N¹⁾, Baba S¹⁾ (¹Kitasato Univ) Computer simulated additional deep apical biopsy enhances cancer detection in palpably benign prostate gland. *Int J Urol* 2006; 13(10): 1290-5.
- 4) Goda R, Nagai D, Akiyama Y, Nishikawa K, Ikemoto I, Aizawa Y, Nagata K, Yamazoe Y. Detection of a new N-oxidized metabolite of flutamide, N-[4-nitro-3-(trifluoromethyl) Phenyl]hydroxylamine, in human liver microsomes and urine of prostate cancer patients. *Drug Metab Dispos* 2006; 34: 828-35.
- 5) Fukumitsu N, Ashida H, Ogi A, Uchiyama M, Mori Y, Ikemoto I, Sakamoto N, Tojo K, Kawakami M. A case of ganglioneuroma in which ¹³¹I-6 β -iodomethy-19-norcholest-5(10)-en-3 β -ol scintigraphy showed high uptake in the adrenal gland leading to a misdiagnosis. *Ann Nucl Med* 2006; 20(1): 69-73.
- 6) Furuta A, Thomas CA, Higashi M, Chancellor MB, Yoshimura N, Yamaguchi O. The promise of beta3-adrenoceptor agonists to treat the overactive bladder. *Urol Clin North Am* 2006; 33(4): 539-43.
- 7) Hiraoka K¹⁾, Kimura T, Logg CR¹⁾, Kasahara N¹⁾ (¹David Geffen School of Medicine). Tumor-selective gene expression in a hepatic metastasis

model after locoregional delivery of a replication-competent retrovirus vector. Clin Cancer Res 2006; 12(23): 7108-16.

- 8) Miki K, Shimomura T, Kishimoto K, Ohishi Y, Harada J, Egawa S. Percutaneous cryoablation of renal cell carcinoma guided by horizontal open magnetic resonance imaging. Int J Urol 2006; 13: 880-4.
- 9) 入江 啓¹⁾, 松本和将¹⁾, 佐藤威文¹⁾, 丸 典夫¹⁾, 岩村正嗣¹⁾, 額川 晋, 馬場志郎¹⁾ (北里大学). 浸潤性膀胱癌に対する腹腔鏡下膀胱全摘除と開腹リンパ節郭清・尿路変向併用術式の手術成績. 日本EE学会誌 2006; 19(1): 103-8.
- 10) 佐藤誠一¹⁾, 額川 晋, 伊藤明宏¹⁾, 荒井陽一¹⁾ (東北大学). 最近における癌遺伝子・抑制遺伝子の研究—前立腺癌— 前立腺癌の糖鎖マーカーRM2抗原 (β 1,4-GalNAc-disialyl-Lc4). Biotherapy 2006; 20(4): 418-26.
- 11) 池本 庸, 柚須 恒, 佐々木美恵子¹⁾, 小金井淑江¹⁾ (東急病院). アンケート調査から見た前立腺肥大症を有する患者の自己評価—東急病院・泌尿器科での経験—. 東急学会誌 2006; 15: 40-3.

II. 総 説

- 1) 清田 浩, 小野寺昭一, 額川 晋. [外来で見逃せない市中耐性菌と市中感染症] 実例に学ぶ外来診療のポイント クラミジア感染症. 感染と抗菌薬 2006; 9(3): 281-6.
- 2) 清田 浩. 【新人ナース必見! イラストでわかる泌尿器科疾患ノート】膀胱炎. 泌ケア 2006; 11(6): 279-81.
- 3) 清田 浩. 【前立腺疾患 新しい治療法を理解するために】前立腺炎 慢性前立腺炎の診断と治療. Mod Phys 2006; 26(6): 1011-7.
- 4) 清田 浩. 【抗菌化学療法 診断と治療の進歩】臓器感染症の特性と抗菌化学療法 尿路性器感染症 (Genitourinary tract infections). 日内会誌 2006; 95(11): 2238-45.
- 5) 下村達也, 佐藤威文 (北里大学), 額川 晋. 特集 進行性前立腺癌に対する治療法の工夫 進行性前立腺癌に対する間歇的低用量抗アンドロゲン療法. 泌外 2006; 19(5): 595-600.
- 6) 山本順啓, 額川 晋. 前立腺癌の診断・治療—Which way forward? 泌外 2006; 19(臨増): 315-7.
- 7) 会プログラム・抄録集 2006; 91]
- 2) 寺地敏彦 (東海大学), 額川 晋, 川端 岳 (神戸大学), 近藤幸尋 (日本医大), 中川 健 (慶応大学). (シンポジウム) 鏡下前立腺全摘術のガイドライン. 第20回日本Endourology & ESWL学会. 大阪, 10月.
- 3) 額川 晋. (シンポジウム) PSA再発の判定基準 (治療後のPSA値の推移について). 第2回泌尿器腫瘍放射線 (GUTR) 研究会. 東京, 10月.
- 4) Kiyota H. (シンポジウム) Watchful waiting for choronic prostatitis/chronic pelvic pain syndrome. 第21回日本環境感染学会総会. 東京, 2月.
- 5) 清田 浩. (ワークショップ) Percutaneous nephrolithotripsy (PNL). 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月.
- 6) 清田 浩. (シンポジウム) 病院感染対策とUTIサーベイランス. 第71回日本泌尿器科学会東部総会. 東京, 10月.
- 7) Kiyota H. (シンポジウム) Presentation of Japanese guideline (Endoscopy and endoscopic surgery). 10th Western Pacific Congress on Chemotherapy. Fukuoka, Dec.
- 8) 池本 庸, 柚須 恒, 小杉 繁, 小出晴久, 波多野孝史, 冨田雅之, 山崎春城, 額川 晋, 中條 洋, 遠藤勝久. 前立腺肥大症薬物療法評価におけるBPH Impact indexの位置づけ. 第71回日本泌尿器科学会東部総会. 第71回日本泌尿器科学会東部総会, 10月. [第71回日本泌尿器科学会東部総会プログラム・抄録集 2006; 200]
- 9) 鈴木康之, 高坂 哲, 岸本幸一, 池本 庸, 鈴木英訓, 築田周一, 古田 昭, 長谷川雄一, 成岡健人, 小杉繁, 梅津清和, 山口泰広, 額川 晋. 下部尿路症状 (LUTS) に対するクエンシルデナフィルの臨床的効果の検討. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 320]
- 10) 鈴木康之, 高坂 哲, 古田 希, 鈴木英訓, 車 英俊, 三木健太, 古田 昭, 長谷川雄一, 成岡健人, 小杉繁, 本田真理子, 額川 晋. 過活動膀胱症状質問表 (OBASS) を用いた塩酸プロピペリンの臨床効果の検討. 第13回日本排尿機能学会. 東京, 9月.
- 11) 古田 希, 長谷川倫男, 山田裕紀, 下村達也, 柚須恒, 小出晴久, 佐々木 裕, 池本 庸, 額川 晋. 副腎褐色細胞腫に対する腹腔鏡下副腎摘除術の検討—開放性手術との比較—. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 318]
- 12) 遠藤勝久, 小野寺昭一. (シンポジウム) 薬剤耐性淋菌感染症の現状. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 135]
- 13) 遠藤勝久, 小野寺昭一. (シンポジウム) 尿道炎の治療: 治療の落とし穴は何か? 第71回日本泌尿器科学

III. 学会発表

- 1) 額川 晋. (特別講演) 前立腺癌の治療法—ハイリスク群に対する考え方—. 第71回日本泌尿器科学会東部総会. 東京, 10月. [第71回日本泌尿器科学会東部総

会東部総会。東京、10月。

- 14) 波多野孝史, 小池祐介, 山口泰広, 梅津清和, 古田昭, 岸本幸一, 吉良慎一郎, 富田雅之, 和田鉄郎, 池本庸, 額川 晋, 五十嵐宏 (熊谷外科), 大西哲郎 (聖隷佐倉病院). 小径腎細胞癌術後転移例の臨床検討. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 230]
- 15) 三木健太. (シンポジウム) 体腔鏡手術と開放手術とのQOL. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 163]
- 16) 車 英俊, 鎌田裕子, 柚須 恒, 鷹橋浩幸, 下村達也, 山田裕紀, 佐々木 裕, 大石正道¹⁾, 小寺義男¹⁾, 前田忠計¹⁾ (北里大学), 額川 晋. 高分子量プロテオミクスにより発見した新規前立腺癌バイオマーカーの組織学的検討. 第94回日本泌尿器科学会総会. 福岡, 4月. [日泌会誌 2006; 90(2): 354]
- 17) Kimura T, Logg CR¹⁾, Hiraoka K¹⁾, Haga K, Lawson GW¹⁾, Matusik R²⁾ (²Vanderbilt Univ School of Medicine), Bochner B³⁾ (³MSKCC), Egawa S, Stripecke R¹⁾, Kasahara N¹⁾ (¹UCLA). Cotrol of extratumoral dissemination of replication competent retrovirus vectors by transcriptional targeting to prostate. International Society for Cancer Gene Therapy Annual Meeting 2006. Chiba, Oct.
- 18) Kimura T, Wang HJ¹⁾, Koya RC¹⁾, Faure-Kumar E¹⁾, Prins R¹⁾, Comin-Anduix B¹⁾, Kasahara N¹⁾, Stripecke R¹⁾ (¹UCLA). Optical bioluminescence and immunologic analyses of lentiviral vectors administered in vivo: Transcriptional targeting though an MHCII promoter yields persistant transgene expression and lack of CTL stimulation in immunocompetent mice indicaing tolerance. American Society of Gene Therapy 9th Annual Meeting. Baltimore, June.
- 19) Hayashi N, Ettinger S¹⁾, Beraldi E¹⁾, Zoubeidi A¹⁾, Fazli L¹⁾, Rocchi P¹⁾, Nelson C, Glave ME¹⁾ (¹the Prostate centre at VGH). Clusterin may regulate NF-KB-regurated genes. the AUA 2006 Annual Meeting. Atlanta, May. [J Urol 2006; 175(4): 84]
- 20) Miki J (CPDR: Center for Prostate Disease Research). (パネルディスカッション) Identification of putative stem cell markers, CD133 and CXCR4, in hTERT-immortalized primary non-malignant and maringant tumor-derived human prostate epithelial cell lines and in prostate cancer specimens. Innovations in Prosteta Cancer Research (American Association for Cancer Research). San Francisco, Dec.

IV. 著 書

- 1) 鈴木康之. 35. 尿検査の意義と方法について教えてください. 後藤百万, 渡邊順子編. ナーシングケア Q & A 第12号 (徹底ガイド 排尿ケア Q&A). 東京: 総合医学社, 2006. p. 68-9.
- 2) 鈴木康之. 36. 尿流測定って何ですか? 後藤百万, 渡邊順子編. ナーシングケア Q&A 第12号 (徹底ガイド 排尿ケア Q&A). 東京: 総合医学社, 2006. p. 70-1.
- 3) 鈴木康之. 37. 残尿測定の意義と方法について教えてください. 後藤百万, 渡邊順子編. ナーシングケア Q&A 第12号 (徹底ガイド 排尿ケア Q&A). 東京: 総合医学社, 2006. p. 72-3.
- 4) 鈴木康之. 38. 尿流動態検査 (ウロダイナミクス) で何がわかるのですか? 後藤百万, 渡邊順子編. ナーシングケア Q&A 第12号 (徹底ガイド 排尿ケア Q&A). 東京: 総合医学社, 2006. p. 74-5.

V. その他

- 1) 鈴木康之. オシッコの問題あれこれ. Urology Today 2006; 13(4): 26-30.
- 2) 富田雅之, 額川 晋. 【前立腺癌放射線治療のすべて 局所限局前立腺癌を中心に】 外科手術の適応と考え方. 臨放線 2006; 51(別冊): 114-22.
- 3) Furuta A. Health care usage, botulinum toxin for overactive bladder. Rev Urol 2006; 8(4): 234-5.
- 4) 佐々木 裕, 長谷川倫男, 池本 庸, 額川 晋. 同側腎に発生した腎細胞癌と腎盂癌の2例. 泌紀 2006; 52: 855-7.
- 5) 讃岐邦太郎, 面野 寛, 塩野 裕, 御厨裕治, 山崎春城, 池本 庸, 額川 晋. 人工血管置換により自然改善した総腸骨動脈瘤による水腎症の1例. 泌外 2006; 19(10): 1257-60.